

Geel の精神医療史

— 16～18世紀における家庭看護 (gezinsverpleging) の実施体制について —

橋 本 明

はじめに

ベルギーのGeelは中世に遡る精神病患者の巡礼地として発展し⁽¹⁾、いまなお精神障害者の里親制度で国際的に知られるユニークな小都市である。過去において、とりわけ19世紀の後半以降になると、欧米諸国では盛んにGeelが紹介され⁽²⁾、その関連文献は膨大な数にのぼる。わが国でも19世紀の終わりに出版された呉秀三の『精神病学集要』⁽³⁾で既にGeelへの言及があり、その後も精神医学関係者のGeelへの関心は常に高いものがあった。しかしながら、ベルギー国外の医学者、研究者、ジャーナリストなどによって紹介されたGeelの記述のほとんどは、断片的なものにとどまり、一時の観察を出ないもので、到底Geelの全体像を知るには及ばない。他方、ベルギーを含むオランダ語圏で出版された文献は、宗教史、美術史、地方史研究の類を含めてGeelに関する極めて豊富な内容を提供するものだが、多くがオランダ語で書かれているためか、ベルギー国外での引用頻度は極端に低くなっている。

筆者はここ数年来、Geelの精神病患者処遇史をヨーロッパにおける精神医学の大潮流の中にどう位置づけるかを念頭におきながら、無謀にもこのGeelの長い発展の全歴史、およびGeelの国際関係史を解明すべく、ベルギー国内に所在する一次的・二次的資料に基づいて“Geel研究”を展開している。そのささやかな成果はいくつかの論文や学会発表の形で公表してきた。本論文もその一連の研究であり、中世の聖人伝と巡礼の時代と、近代的な医学がGeelに到達するまでのさまざまな時期を扱っている。なお、本論文の骨子は、2001年10月に開催された第5回精神医学史学会（京都大学）にて口頭発表を行った。

I 病人部屋

ベルギー、Geelへの精神病患者巡礼の発祥にかかわるSt. Dimpna伝⁽⁴⁾の時代を経て、St.-Dimpna教会の建設が始められたのが1349年と伝えられている⁽⁵⁾。教会でノベナ（9日間の治療の儀式、noveen）⁽⁶⁾を行う巡礼者の宿泊施設、病人部屋(zielenkamer)が設立されたのは15世紀の後半と推定され、1687年には新たに教会に隣接して病人部屋が建てられた。現在残されている外観はこの17世紀の時代のものである⁽⁷⁾（図1）。



図1 St.-Dimpna教会

写真の手前左にある三角屋根の建物が病人部屋である（著者撮影）。

この病人部屋の収容能力はどのくらいのものであったのだろうか。古い病人部屋の構造はほとんど知られていないが、1687年に建てられた新しい病人部屋は1階に大部屋が二つと小部屋を三つ持っていた。一つの大部屋には格子で守られたロフトがあり、そこに教会が雇う監視役の女性が寝泊りしていた。2階にはさらに小部屋が二つあったとされているが⁽⁸⁾、収容定員まではわからない。

病人部屋は多くても十数人程度が寝泊りできる程度ではなかったか⁽⁹⁾。

Geelを訪れた巡礼者全体を把握できる資料はないが、St.-Dimpna教会の病人部屋を利用した精神病患者の数は部分的に明らかにされている。患者数がわかるのは、16世紀にSt.-Dimpna教会に10人の助任司祭で構成される助任司祭会(college van de tien vicarissen)が設立された後のことである。教会に残された会計簿(rekeningen)には、ノベナで患者から支払われた額が記載され、これにより病人部屋利用者の数が推定できるのである。この資料から16～17世紀の患者の出入りは断続的にのみ把握できている。17世紀の終わり頃からは、患者数は正確に把握可能となる。それは、1687年に始まって、フランス支配の余波でSt.-Dimpna教会が閉鎖される1797年までの病人部屋の利用者をすべて記載した*Liber Innocentium I* (または*Sanctae Dimpnae Liber Innocentium Infirmorum, admissi qui sunt in camera infirmitatis ab anno 1687 et deinceps*) の存在による⁽¹⁰⁾。患者名を名簿に記載しSt.-Dimpna教会で儀式を受けた巡礼者として登録することは、St.Dimpnaとの精神的つながりを保持しつづけるという意味で治療的な儀式の一つと理解されていたし、患者が例えば自殺したような場合、登録者として例外的に教会で葬儀を行うことが可能になるなど、登録には法的に有利な立場を患者に与えるという実利的な側面もあった⁽¹¹⁾。

では、実際に病人部屋を利用した患者数の推移を見ておきたい。1538年から1600年にかけては、このうちの19年分しかわからず患者数のばらつきも大きい。17世紀にGeelを訪れた巡礼者の数は、ブラバント地方の政治的、宗教的混乱に強く影響された。連続的に数値を追うことが可能な1620年以降の傾向を概観すると、年間の病人部屋利用者は1660年頃までは5～20人くらいで推移している。その後1670年頃から患者数が増え始め、18世紀の終わり頃までは20～50人くらいで変化している。18世紀には政治的安定が比較的保たれてフランス革命までは病人部屋の利用者数も高水準で動いている⁽¹²⁾。ただし、1年間の利用者数がたかだか20～50人であったということは、ひと月に直せば数人となり、病人部屋の滞在は原則9日間であることを考えると精神病患者が病人部屋に殺到したとはいえないかもしれない。しかし、精神病患者の巡礼はSt.Dimpnaの祝祭日のある5月から夏場にかけて集中した⁽¹³⁾といわれることを考えると、さほど広くない病人部屋が満室であることもしばしばあったものと考えられる。そうして、病人部屋の空きを待つまでのあいだ教会周辺の民家に滞在する、あるいは滞在している民家からノベ

ナに通う、という形で村人、すなわち里親と巡礼者である精神病患者との関係が形成されていった。さらに、ノベナを繰り返す行う、ノベナで得られた治癒の効果が持続するかどうかを見極めるために滞在を延ばす、といった理由で、精神病患者の里親での滞在は長引いていく。このようにして家庭看護(*gezinsverpleging*)が発展したのである⁽¹⁴⁾。

上記の資料から患者数を総計すると、17世紀には少なくとも1233人が病人部屋を利用したことがわかる。このうち里親のところに滞在したことが判明しているのが542人、病院(*gasthuis*)が21人である。Geelの病院は1286年に設立され、もともと貧困患者のための施設であり精神病患者の世話とは無関係であったが、17世紀になると精神病患者も収容され始めた。一つには病院の財源問題があったとされる。残りの600人以上は不明だが、恐らく大半は里親のところに滞在していたものと考えられる。さらに、18世紀は*Liber Innocentium I*の記載にもとづけば3696人がGeelに滞在したことになる。滞在場所は里親のところであるが、このうち85人だけは病人部屋のみ泊まり、ノベナを終えたあと里親を経由することなく実家に帰ったようである⁽¹⁵⁾。

II 教会参事会と1532年体制

それにしても、こうしたシステム全体は誰によってどのように運営されていたのだろうか。

St.-Dimpna教会の巡礼患者への支援体制が形式的に整ったのは1532年といわれ、これ以前の教会のやり方はよくわからないが、患者に対して非常に献身的であったことは確かなようで、幾人かの司祭の名前がそのことで知られている。1532年にはSt.-Dimpna教会に10人の助任司祭で構成される助任司祭会が発足し、やがてつくられる教会参事会(*kapittel*)の前身となった。これが巡礼者の世話を公式に担当し、ノベナの窓口となり、家庭看護を行う里親も紹介した。彼らの仕事は、①毎日、病人部屋に患者を訪問し、ミサを行い、沐浴をさせる、②定期的に患者の食料や衣服に気を配り、ベッドの世話をする、③患者をよく観察して秘跡を行うのに清明な瞬間をとらえる、④患者を束縛する必要がないかどうかをチェックする、といったことであった⁽¹⁶⁾。

教会参事会を構成する聖職者たちが全体のシステムを管理していたとはいえ、ノベナの中に患者の身の世話をする専任の介護人が存在した。この介護人が登場した正確な時期を特定することはできないが、病人部屋が作られたころにはその中に介護人が寝泊りし、患者を監督する一角があった。介護人は通常2人の女性であり、St.-

Dimpna教会の教会参事会と教会財産管理委員によって雇われていた。「病人保護人(sieckenwaersters)」、「病人部屋の娘(docgter in de sieccaemer)」などと呼ばれた介護人の中には、長期間この仕事に就いていた者もある。介護人として、昼となく夜となく働き、興奮する患者に立ち向かう場面もあったが、深刻な事件に発展したという記録は残されていない。ただし、夜間は患者から身を守るために病人部屋の鉄柵で仕切られた一角に寝た⁽¹⁷⁾。

さて、以上のような教会のサービスに対して、患者はどのくらいの費用を負担していたのだろうか。古くはその費用の大部分を物品でまかなっていた。まず、体重計測のために穀物 1 veertel⁽¹⁸⁾ 分を教会参事会に差し出した。もともとは患者の体重分に相当する穀物を奉納していたもので、守護聖人の前で大天秤を使って体重計測を行うことはGeelだけではなく巡礼地で広くおこなわれていた秘跡のひとつであって、聖人への従属の意味合いが込められていた(図2)。経費の全体からみると、ノベ

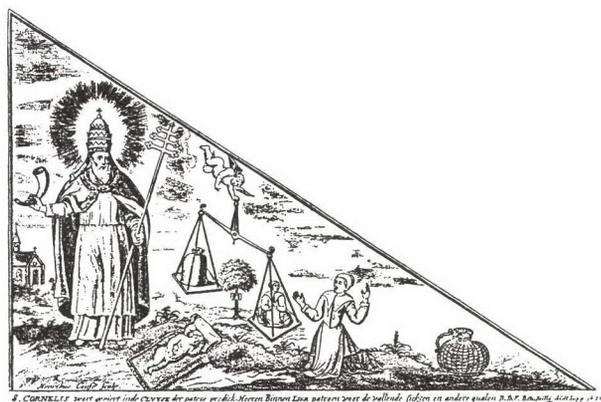


図2 大天秤による体重計測

これはAntwerpen近郊の街LierでのSt.Cornelius信仰を示した17世紀の図である。子供の痙攣発作などの守護聖人として人気を博したSt.Corneliusの前で、体重計測が行われている。出典：Van Heurck [1922] p.263。

ナの登録料という位置づけではないかと思われる。次に洗浄のためのワインを 1 stoop⁽¹⁹⁾、ベッドの使用と目覚ましに対して 3 stuiver⁽²⁰⁾、贖罪の儀式に対して 1 日あたりレンガ 2 個、9 日分の灯り用の油脂を 1 pint⁽²¹⁾、10月1日から3月中旬までは病人部屋の介護人用に薪を 2 束、と決められていた。やがて、物品で払われていた部分はすべて現金にかわった。1640年代のノベナの料金表は次のようになっている。

教会参事会に支払う体重計測代	32	stuiver
洗浄のためのワイン代	22	stuiver
患者の昼と夜の世話代 (1日あたり 2 stuiver×9日)	18	stuiver
日々の贖罪代	50	stuiver
聖堂番に支払う鐘代 (病人部屋を退所する時に鳴らされた)	1	stuiver
総額	6 gulden 3	stuiver (1 gulden = 20 stuiver)

上記のように、6 gulden 3 stuiver が9日間病人部屋に宿泊した場合に1回のノベナにかかる費用の総額である。また1735年の記録では、この総額が7 gulden 15 stuiver になっている。この時の内訳は、教会参事会に支払う体重計測代が32 stuiver、ワイン、灯り、滞在費合わせて2 gulden、教会内外の歩き巡り儀式の代役少女に9 stuiver、残りが病人部屋の介護人の分となっている⁽²²⁾。

しかし、これらの額が当時の物価と比べて、どれくらい高いのか、それとも逆に低いのかはよくわからない。ただ、Geelの精神病患者の里親に支払われていた扶養費と比較することで、なんらかのイメージはつかめるだろう。実のところ扶養費といっても、患者がどこからどのようなルートによってGeelに来たかによってその額は異なると考えられるが、資料的には「貧者の食卓」(Armentafel)⁽²³⁾を通じて紹介されてきた患者のみ扶養費の把握がなんとか可能である。これらの患者は貧困により行き場を失ったいわば「公費」患者であって、里親に支払われる額はあまり高くはなかったと考えられる。その中でGeelに多くの患者を送り込んでいたAntwerpen、Mechelen、Turnhoutの各都市における17~18世紀の資料から、大雑把に1年1人あたりの平均扶養料を出すと52 gulden になる⁽²⁴⁾。これを1ヶ月あたりにすると4.33 guldenである。上記でみたノベナ1回の経費の合計は、6 gulden 3 stuiver (すなわち6.15 gulden)、あるいは7 gulden 15 stuiver (すなわち7.75 gulden) であり、これだけを比較する限り、9日間の儀式の費用は1ヶ月に支払われる患者扶養費よりもかなり高額であることになる。ちなみに、後でも述べるが、原則として各都市の「貧者の食卓」を経由してGeelに流入した「公費」患者はノベナを受けることはなかった。

III 地方役人によるコントロール

けれども、多くの巡礼者がGeelに流入し、場合によっ

ては長期滞在することは、St.-Dimpna教会参事会と里親との関係だけでは済まない問題を含んでいた。

たとえばSt.-Dimpna教会自体はGeelのSt.-Amands教会の小教区内に位置し、ふたつの教会の利害は対立していた。というのも、本来St.-Amands教会が行うべき小教区教会としての業務をSt.-Dimpna教会が侵害しているからであった。そこで1548年に両教会で取り決めをし、St.-Dimpna教会の教会参事会長がGeelに留まる患者に秘跡を行い、彼が患者の埋葬権を保持することが確認された。しかし、なにぶん教会の収入に関わることであり問題は再燃する。1660年代に起こされた埋葬権を巡る訴訟では、St.-Dimpna教会側は上記で述べた教会参事会の仕事内容をあげて、St.-Amands教会での精神病患者の世話は無理であるとの主張がされた。また、患者がSt.-Dimpna教会によって埋葬されることはSt.-Dimpnaへの「服従の証し」という重要な意味も込められていた。だが、結局1670年にSt.-Dimpna教会の権利は限定されることになり、1年以上St.-Amands教会の小教区に住んでいた患者の埋葬権ならびに秘跡を行う権利はSt.-Amands教会側に移された⁽²⁵⁾。なお、St.-Dimpna教会が独立の小教区教会となったのは1874年である⁽²⁶⁾。

さらに重大なのは地方役人の役割である。そもそもGeelは13世紀から18世紀の末期まで封建領主から自治権を獲得した都市として発展し、領主から任命を受けた代官(drossaard)と7人の参審人(schepen)によって統治されていた⁽²⁷⁾。これら地方役人による家庭看護に関する法的基盤は、1532年の教会の体制よりも古く、Jan van Royeが代官であった1458年から1483年にかけて整備された。彼らの関心事は貧困者の流入による財政負担の増大であり、それが地方役人自身も一翼を担っているGeelの「貧者の食卓」の負担にならないかとの憂慮があった。「貧者の食卓」は、本稿の注23でも触れているが、南ネーデルランドや北フランス各地に存在した救貧・慈善事業を行う組織で、聖職者と自治体の有力者によって構成されていた。事業の内容としては、小教区に在宅の貧民や病人、里子、捨て子を対象に、物資や現金で援助を行い、その資金は組織が所有する土地からの地代や寄附などでまかなわれていた。Geelに限らず、「貧者の食卓」が援助するのはあくまで在住の民であり、単なる巡礼者、旅行者は対象とはならなかった⁽²⁸⁾。したがって、他の地から流入した者がGeelの住人になるための申請には厳しい条件が出された。申請者は、品行方正であることが証明されなければならない、身元保証人をたて、今後7年間に子どもが「貧者の食卓」の援助を受けないことを約束しなければならない。精神病患者の流入についても、地

方役人たちは水際でさまざまなチェックをしている。まず、Geelでノベナを受け里親に滞在する患者は、保証人の手紙が必要で、扶養費が払えなくなった場合でも「貧者の食卓」には費用負担をかけないことを示さなければならなかった。さらに精神病であることの証明をしなければならず、犯罪時の減刑措置などの精神病患者としての法的地位を得るためには精神病であることの証明書類が必要だった⁽²⁹⁾。こうして、Geelへの定住化や無秩序な流入はコントロールされたのである。

IV 巡礼地の変容

ところが17世紀のおわり頃になると、教会参事会をノベナや家庭看護の窓口とする「1532年体制」に変化が生じ始める。それは貧困精神病患者のGeelへの流入によってもたらされたものである。17～18世紀には、都市出身の貧しい精神病患者が行き場をなくすと、各都市の「貧者の食卓」を通じて近隣の村の農家などに下宿させるという方が採られていた。ブラバント地方の中心都市AntwerpenやMechelen、Turnhoutからは大量の患者が、近隣の村に移送された。Geelもその選択肢の一つだった。ただ、Geelは知名度もあり、既に里親が発達していたので、患者を送る側にとっては他の村よりも都合だったのである。こうして「貧者の食卓」を通じてGeelに患者が次々に送り込まれてくると、ノベナの儀式を行い、里親に下宿するというそれまでの宗教儀式を第一に考えていたシステムが部分的に崩壊していく。というのも、一部の例外を除いて、貧困患者は教会での儀式には参加せず、里親のところに滞在することだけが目的であったからである。貧困患者がノベナを受けない理由の一つは、各地の「貧者の食卓」から送られた「公費」患者であることに由来する。Geel以外の村に送り込んだ「公費」患者とのバランスを考えると、Geelの患者だけを優遇できないという配慮があったものと推察されている。実はGeelに滞在した患者名を知ることができる *Liber Innocentium I* には、各地の「貧者の食卓」を通じてGeelの里親に下宿した患者は記載されていない。なぜなら、彼らはノベナを実施しない患者だからである。したがって、Geelに貧困患者が送り込まれて以降の患者全数の正確な把握はできないことになる。ただ、患者を送りこんだ都市側に残された記録によれば、1748年から1775年にかけて、240人程度の貧困精神病患者がAntwerpenの「貧者の食卓」からGeelに移送されたことがわかっている。これほど大量でないにしても、他の都市からの流入も断続的であった。貧困患者については教会参事会を経由せずに、患者を送る側の都市の「貧者の食卓」が募集して集めた

Geelの仲介人を通して、里親が紹介されたのである⁽³⁰⁾。

それでは、Geelに滞在する精神病患者の中で、貧困患者とそれ以外の私費患者との比率はどれくらいだったのだろうか。たとえば1755年のGeelの人口調査では、272人が精神病患者として把握されている。この272人の名前と*Liber Innocentium I*に記載されている名前のうち1754年の記載分44人とを照らしあわせると、15人が重複している。これは*Liber Innocentium I*の15人が住人と認識され、残りの29人は恐らくGeelに来て間もない者であり、単に“巡礼者”とされてGeelの人口に加えられていないと思われる。さらに、1754年より前の*Liber Innocentium I*に名前が記載されている患者で、その後もGeelに滞在して同じ人口調査の272人と重複するのは45人である。したがって15人に45人を加えた計60人は住人と認識され、しかも*Liber Innocentium I*に記載されているということで、ノベナを受け私費で扶養されている患者たちと考えられる。一方、272人のうち189人は各地の「貧者の食卓」から送られた貧困患者であることが調査の記述からわかる。ただし、Geelの地区によっては、当然あるはずの貧困者と同定できる記述が全く欠落しており、実際の貧困者数は189人よりも多いと推察される。そうすると、1755年の人口調査では、私費患者が少なくとも60人、貧困患者が少なくとも189人となる⁽³¹⁾。この数字だけを拾えば私費患者の3倍強の貧困患者がGeelの住民と認識されていたことがわかる。不明な部分も多いが、この時点では貧困患者はGeelの精神病患者でかなりの割合を占めていたことは間違いないだろう。

このように18世紀頃にはGeelの大半の精神病患者にとって、宗教的治療は縁遠いものになり、Geelに暮らすことが第一義的な目的になっていった。教会の存在感が次第に色あせ、巡礼地としての役割を次第になくしていくGeelの家庭看護と向き合う地方役人たちの態度はどのようなものであったのだろうか。

役人たちの関心事は、治安であり、患者処遇の問題であった。先に述べた都市からの貧困患者の流入が、Geelの「貧者の食卓」を脅かすことは基本的にない。言うまでもなく彼らは「公費」患者であり、出身地の「貧者の食卓」が扶養料を里親に支払い、場合によっては衣料品なども提供していたからである。Geelの懐が痛まないばかりか、逆にこの街に経済的効果をもたらしたと考えられる⁽³²⁾。問題は患者や里親の振る舞いだったのである。代官と参審人は、住人と患者との良好な関係を保つ目的で17世紀から18世紀にかけて3回布告(*ordonnantie*)を出している。これらの布告から、患者の行動や態度が住

人の間に混乱をもたらしていたことが伺われる。最初の布告は1676年のものである。これはある特定の出来事が起きた結果として作られたと考えられが、その出来事が何であったかは不明である。今後は「家に狂人や愚者(*sotten*)を住まわせている者は、彼らが他人を傷つけないように手足を固定すること」と決められた。しかし、この規則は守られず、相変わらず里親は患者に自由を与えつづけたため、事件や事故はなくならなかった。そこで1747年には再び布告が作られる。その序文には「狂人や愚者たちは混乱を引き起こしているが、下宿先の家人は彼らを打たないどころか、徘徊させ、溺死させ、災難に合わせている」とある。また、教会内での混乱も多かったのか、付添い人がなければ患者は教会には立ち入り禁止とされた。それでもやはり規則に効果がなく、1754年にまた布告が出された。出された理由は前回とほぼ同様で、患者が多くの混乱を起こしているのに、忠告されると「うちの患者は誰にも危害を加えない、世界で一番よい人間だ」と里親は主張するばかりで何の予防策もしていないというものである。1754年の布告はこれまでにない要素が盛り込まれている。それは火災予防のため、絶対に患者には火のついたランプやパイプを持たせて外出させてはならないということと、夏季(復活祭から10月1日まで)は夕方7時から翌朝6時まで、冬季(10月1日から復活祭まで)は夕方4時から翌朝8時まで患者は家から外出禁止とされたことである。なお、これまでの布告のすべてには違反した場合の罰則が設けられていた⁽³³⁾。

しかしながら、従来の実施体制もやがて終焉をむかえる。フランス革命を経て、1795年にはブラバントの地はフランスに併合され、これまでの支配体制は反故になった。1797年にはついにSt.-Dimpna教会が閉鎖され、教会参事会は解散し、病人部屋は使用できなくなった。*Liber Innocentium I*の患者名の記載も1797年6月で終わっている。教会参事会と地方役人によって維持されてきた家庭看護をコントロールする公式の組織は存在しなくなったのである。したがって患者の監督は里親に全くゆだねられることになった。ただし、貧困患者を大量にGeelに送り込んでいた都市は、自前の里親紹介組織を持っていたので、自分たちの患者については監督を行っていた。一方、都市によっては患者をGeelから連れ戻すところもあった。いずれにしても、この時期の混乱でGeelへの巡礼者およびこの地に滞在する精神病患者は減少せざるを得なかった。だが、これも数年のことで、19世紀の始めには再びGeelに滞在する精神病患者はすばやく増加していった⁽³⁴⁾。19世紀におけるGeelの課題を一言で言えば、家庭看護の近代化であり、医学的管理体制を確立するこ

とであった。この19世紀の展開については稿を改めて論じたい。

注

- (1) 巡礼地Geelの歴史をもっとも包括的に記述したものの一つがKuyt [1863]の著作である。
- (2) フランスのジャーナリストDuval [1867]の著作は、Geelの里親制度の国内外からの評判をまとめたものとしては嚆矢であろう。
- (3) 呉 [1895] pp.549-550. 呉はこの著作のなかで家庭看護を「私宅看護」として紹介し、「精神病者ヲシテ長ク適当ナル他家ニ居ラシムルヲ云ヒテ又治方ノ一端ヲ此方ハ白耳義ノ一村落~~ハ~~ニテ古来、宗教上ヨリ執行スル」と述べている。
- (4) St.Dimpna伝は、Cambraiの司教座聖堂参事会員Petrus Cameracensisによって1238~1247年の間に著されたラテン語のテキストに基づくものとされているが、比較的入手しやすい19世紀以降のSt.Dimpna伝の記述としては、上記の注1のKuyt [1863]以外に、Butler A, Godescard J-F [1855] p.479, Hillegeer J [1868] pp. 259-266, Collin de Plancy MJ [1873] pp.727-728, Dunbar ABC [1904] p.246, Baudot D [1925] p.213, Attwater D [1936] p.85, Thurston H, Lesson N [1938] pp.191-193, Bénédictins de Paris [1947] p.303, Coulson J [1957] pp.151-152, Pochin Mould D [1964] pp.146-147, Farmer DH [1978] p.115, Attwater D, John CR [1983] p.107などがある。
- (5) St.Dympna and Hospital Museum Geel [1998]
- (6) ノベナは巡礼地で一般的に行われていたものである。Geelではノベナが7つの内容に大別され、精神病の原因が罪であるという考えに基づき、精神病者の贖罪と呼ばれていた。7つの贖罪とは以下のものである(橋本 [2001])。
 - ① 患者は9日間、教会の回りを歩く以外は病人部屋に留まらなければならない。
 - ② 聖遺物崇拜。1日3回、患者は教会の中または外に沿って歩いた。さらに、1日3回、裸足で聖遺物の下を這いながら、「我らが父よ」と30回、「アヴェ・マリア」と30回と唱えた。
 - ③ 聖杯水とミサ。9日間の祈りの期間中、毎日の患者のためにミサに続いて聖杯を洗うための洗浄水が飲用として患者に与えられ、それからまじないとお祈りが行われた。
 - ④ 服を着替えないこと。患者は9日間服を着替えず、そのまま寝なくてはならなかった。
 - ⑤ 体重計測。精神病者の体重を測り、体重と同じ重さの穀物がSt.Dimpnaに奉納された。
 - ⑥ 物乞い。⑤の贖罪のSt.Dimpnaに奉納する穀物は、物乞いをして集めなければならなかった。
 - ⑦ 告白と聖体拝領。
- (7) Koyen MH [1973] pp.35-39.
- (8) Van Doninck A [1934]
- (9) 第二次世界大戦中に破壊されやがて再興されたこの建物の内部を2001年3月に著者が見学して得た印象では、患者を収容できるスペースは決して広くはない。
 - (10) Koyen MH [1973] pp.48-53.
 - (11) Koyen MH [1973] pp.66-69.
 - (12) Van Doninck A [1936]; Koyen MH [1973] pp.48-53.
 - (13) Van Doninck A [1936]
 - (14) 巡礼地の教会におけるノベナの期間のみ、近隣の民家に精神病者が滞在することは珍しいことではない。しかし、他の巡礼地と違うGeelの特徴はその滞在が長期間にわたったことである。また、Geelでの民家の利用が始まる一つの契機として、1541年におけるSt.-Dimpna教会の塔の崩壊があげられる。これにより、教会内部にあった病人部屋での収容が一時不可能になった。その際、宿泊場所として民家が提供され、病人部屋再興後もその習慣が続いたのだという(Koyen MH [1973] p.73.)。
 - (15) Koyen MH [1973] pp.81-86.
 - (16) Koyen MH [1973] pp.55-57.
 - (17) Van Doninck A [1934]; Koyen MH [1973] pp.58-59.
 - (18) veertelはviertelとも表記し、かつて使われていた穀物などの容積を表す単位である(Van Dale Groot Woordenboek der Nederlandse Taal [1984])。ただし、実際の容積は穀物の種類や地域によってかなりの違いがあったようで、約10リットルから約100リットルまで幅が見られる(Hogeschool voor Wetenschap en Kunst, BrusselのVande Winkel氏の2001年2月9日付けのe-mailより)。
 - (19) 1 stoopは約2リットル(Van Dale Groot Woordenboek der Nederlandse Taal [1984])。
 - (20) 1 stuiverは5 cent、すなわち20分の1 guldenギルダー(Kramers Handwoordenboek Nederlandse [1996])。
 - (21) 1 pintは標準的には2分の1リットル(Van Dale Groot Woordenboek der Nederlandse Taal [1984])。
 - (22) Van Doninck A [1934]; Koyen MH [1973] pp.60-61.
 - (23) ArmentafelはHeilige Geesttafelとも呼ばれ、それぞれ「貧者の食卓」、「聖霊の食卓」と訳されているが、中世に南ネーデルランドや北フランスで成立した救済組織の一つである(河原 [2001] pp.99-144.)。Armentafelは聖職者と自治体の有力者(役人、富裕民)によって構成されていた。フランス支配でこの組織は解体され、その後純然たる自治体の福祉部局へと置き換わっていった(Koyen MH, De Bont M [1975] pp.64-66.)。
 - (24) Koyen MH [1973] pp.110-120. 17~18世紀におけるGeelに滞在する貧困精神病患者への各都市のArmentafelから支払われていた一人あたりの扶養費の年額はおよそ以下のとおりである。Mechelen: 90.5 gulden, Antwerpen: 45.5 gulden, Turnhout: 60 gulden. なお、Geelに私費で滞在していた者が里親に支払う金額についてはデータが乏しく確定的なことは言えないが、概してArmentafelからの額よりも高かったものと推察されている。
 - (25) Koyen MH [1973] pp.55-57, 93-95.
 - (26) St.Dympna and Hospital Museum Geel [1998]
 - (27) De Bont M [1976] pp.11-35.
 - (28) Koyen MH, De Bont M [1975] pp.64-66; 河原 [2001] pp.99-144.
 - (29) Koyen MH [1973] pp.78-81.
 - (30) Koyen MH [1973] pp.76-77.
 - (31) Koyen MH [1973] p.110. なお、1755年のGeelの全人口は、4992人と推計されている(De Bont M [1976] pp.45-46.)。

- 32) Koyen MH [1973] pp.119-120.
 33) Veraghtert K [1969]; Koyen MH [1973] pp.127-133.
 34) Koyen MH [1973] pp.135-141.

文献

- Attwater D [1936] A dictionary of saints. Burns Oates & Washbourne, London.
- Attwater D, John CR [1983] The Penguin Dictionary of Saints. Second edition, Penguin Books, Harmondsworth.
- Baudot D [1925] Dictionnaire d'hagiographie. Bloud & Gay, Paris.
- Bénédictins de Paris [1947] Vies des saints et des bienheureux selon l'ordre du calendrier. Tome V. Letouzey et Ané, Paris.
- Butler A, Godescard J-F [1855] Vies des saints. Tome deuxième. L.Lefort, Lille.
- Collin de Plancy MJ [1873] Grande vie des saints. Tome neuvième. Louis Vivès, Paris.
- Coulson J [1957] The Saints: A Concise Biographical Dictionary. Hawthorn Books, New York.
- De Bont M [1976] Geel van gisteren tot morgen. Lions, Mol-Geel.
- Dunbar ABC [1904] A dictionary of saintly women. Volume I. George Bell & Sons, London.
- Duval J [1867] Gheel ou une colonie d'aliénés vivant en famille et en liberté. Hachette, Paris.
- Farmer DH [1978] The Oxford Dictionary of Saints. Clarendon Press, Oxford.
- 橋本 明 [2001] 「Geelの精神医療史－伝承と巡礼について－」『精神医学史研究』5(2), 19-28頁.
- Hillegeer J [1868] België en zijne heiligen. Eerste deel, J. en H. Vander Schelden, Gent.
- 河原 温 [2001] 『中世フランドルの都市と社会』中央大学出版部.
- Koyen MH [1973] Gezinsverpleging van geesteszieken te Geel tot einde 18de eeuw. In JAARBOEK van de Vrijheid en het Land van Geel 12, uitgegeven door Geels Geschiedkundig Genootschap, Geel.
- Koyen MH, De Bont M [1975] Geel door de eeuwen heen. Comite Sint-Dimpnajaar, Geel.
- Kramers Handwoordenboek Nederlands [1996] Elsevier, Amsterdam.
- 呉 秀三 [1895] 『精神病学集要 後編』吐鳳堂書店.
- Kuyl PD [1863] Gheel vermaerd door den eerdienst der Heilige Dimpna. J.-E.Buschman, Antwerpen.
- Pochin Mould D [1964] The Irish Saints. Clonmore and Reynolds, Dublin.
- St.Dympna and Hospital Museum Geel [1998] St.Dympna Church Geel, Geel.
- Thurston H, Lesson N [1938] The lives of the saints. Vol. V. Burns Oates & Washbourne, London.
- Van Dale Groot Woordenboek der Nederlandse Taal [1984] Van Dale Lexicografie, Utrecht/Antwerpen.
- Van Doninck A [1934] Verplegingsoord van geesteszieken te Geel. De Ziekenkamer. De Zuiderkempen Geschied- en Oudheidkundigekring Voor de Kantons Westerloo Beringen Mol, 3e Jaargang: 113-128.
- Van Doninck A [1936] Verplegingsoord van geesteszieken te Geel. De Ziekenkamer (Slot). De Zuiderkempen Geschied- en Oudheidkundigekring Voor de Kantons Westerloo Beringen Mol, 5e Jaargang: 1-21.
- Van Heurck EH [1922] Les drapelets de pèlerinage en Belgique et dans les pays voisins. J.-E.Buschmann, Anvers.
- Veraghtert K [1969] De Overheid en de Geelse Gezinsverpleging, 1660-1860. Annalen van de Belgische Vereniging voor Hospitaal Geschiedenis, 7: 115-127.

A history of psychiatry in Geel, Belgium: Gezinsverpleging, or foster-family care for the mentally ill, from the 16th to the 18th century

HASHIMOTO Akira

During the time of the legend and cult of St. Dimpna's in the Middle Ages, Geel became a popular destination of pilgrimages for the mentally ill. A nine-day church ritual, novena, was the most important treatment for these people at the time. Although St. Dimpna Church had a sickroom to accommodate pilgrims for nine days, its capacity was limited and some patients, while waiting for novena, stayed with people in Geel. After finishing the ritual, some patients continued to stay there. This practice is the origin of gezinsverpleging, the system of accepting patients into a sickroom, conducting novena, and introducing the patients to a foster family. The practice started in 1532, when the church council began to be organized. At the same time, the community of Geel strictly controlled the influx and the settlement of patients. A drossaard (bailiff) and seven schepenen (aldermen), who governed Geel, feared that the poor from other communities would be a burden to Geel's armentafel, a philanthropic organization which was common in northern France and the southern Netherlands.

"The year 1532 regime," however, was changed because of the influx of poor people from the armentafel of big cities in the 17th century. Those patients were not a burden because the cost of caring for the poor patients was paid by the armentafels of their country, but they brought an economic effect to Geel. Eventually the poor made up the majority of the patients in Geel, and the religious side of the Geel system gradually vanished because they did not take part in novena and their sole objective was to stay with foster families. Geel's interest was rather concentrated on coping with troubles caused by the patients. The drossaards and schepenen enacted various regulations regarding foster-family care and patient behavior three times during the 17th and 18th centuries. However, during the French Revolution, the Geel system was totally cancelled. In 1797, St. Dimpna Church was closed, its council was dissolved, and the drossaard and the schepenen could no longer govern the community. Then, in the 19th century, Geel encountered a new era of modern medicine.